The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ニューカマー高校生の友人関係 : 日本の小中学校での経験に注目して
Author(s)	比嘉, 康則
Citation	大阪大学教育学年報. 2010, 15, p. 87-101
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/4255
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ニューカマー高校生の友人関係
―日本の小中学校での経験に注目して―

比　嘉　康　則

【要旨】

本稿では、ニューカマー高校生が日本人／外国人と結んでいる友人関係について分析を行った。先行研究からは、日本人／外国人の境界線がニューカマーの子どもたちに抑圧的にはたらくこともあれば、資源にもなりえることが指摘されてきた。よって本稿では、日本の中学校までの経験の中で、ニューカマー高校生が日本人／外国人の境界線をいかに経験しており、それが友人関係とどのように関係しているのかに注目した。事例となったのは、大阪府の特別枠設置高校の生徒たちである。

ネットワーク図とインタビューによる調査から得られた結果からは、次のようなことがわかった。まず、ニューカマー高校生たちは、日本人との間よりも外国人同士の友人関係の数が多く、それはかれらによって積極的に選ばれていることがうかがえた。また、日本人から排斥された経験は、日本人とだけではなく外国人とのものを含む友人関係を、少なくする傾向にあった。日本語力の不足といった理由による排斥の経験は、ニューカマー高校生たちに、友人関係一般から距離を取る構えを形成している可能性がある。クラス単位でニューカマーの子どもたちをめぐる関係に介入する手立てが、必要とされる。

1.　問題設定

本稿の目的は、ニューカマー高校生が日本人／外国人とどのような友人関係を結んでいるのか、そして、ニューカマー高校生の日本の小中学校での経験が友人関係とどのように関連しているのかを、明らかにすることである。

仲間集団ないし学級集団は、子どもたちの社会化を担うひとつの重要な集団である（住田2000）。よって、友人関係を問う本稿は、ニューカマー高校生の社会化の様相を分析の射程に含む。日本人児童生徒が多数を占める学校のなかで生活してきたニューカマー高校生は、どのように社会化されているのだろうか。

2.　先行研究

2.1.「ニューカマーと教育」研究

日本のニューカマー児童生徒に関する研究において、日本の公立学校は、ニューカマーの子どもたちに対して抑圧的なものとして批判的に捉えられてきた（恒吉1996、太田2000、志水・清水2001）。

日本の学校文化の背後には「自文化中心主義」がある、という指摘がある。児島（2006）は、教師の指導においては、教師と生徒が日本人アイデンティティを維持することが暗黙のうちに企図されている、とした。ニューカマーの子どもたちはそこにおいて、日本人とは異なる存在として排除される。同時に、ニューカマーの子どもたちは、場面によっては日本人と同じ「生徒」の中に包摂される。この２つの戦略を教師が効果的に使い分けることにより、日本人教師と日本人生徒の間の日本人アイデンティティの維持は、首尾よく進め

られていくとされる（111-134頁）。

そのような「自文化中心主義」的な日本の学校の中で、ニューカマーの子どもたちは日本人の子どもとどのような関係を築いているのか。清水（2006）は、ニューカマーの子どもたちのいじめ経験を通して、ニューカマーの子どもたちが学級集団の周辺に位置づいていく様子を分析した。日本の学校の中で、子どもたちは、相互の権力関係に基づく「人間関係の地図」を意識しながら「棲み分け」を自然と行っている。そのような教室の日常において、ニューカマーの子どもたちに対するいじめとは、かれらを「人間関係の地図」の周辺に追いやっていくことである（45-64頁）。教師と同様、子どもたちの側もまた、「自文化」を保守するかたちで教室内の関係をつくり上げている、と捉えることができるだろう。

以上の議論によれば、ニューカマーの子どもたちが経験している学校生活は、日本人／外国人の間の、権力関係を伴った境界線によって規定されていると言える。では、ニューカマーの子どもと日本人の子どもの間には、境界線をはさんだ埋めがたい距離が、常に置かれることになるのだろうか。

児島や清水が、教室のなかで否定的な意味を負わされるものとしてニューカマーの差異を捉えていたのに対し、森田（2007）は、対人関係のなかで肯定的な自己意識を自ら獲得し、安定した学校生活を送る際の「資源」として、ニューカマーの子どもたちの差異がはたらいている様子を仔細に描いている。森田によれば、差異が「資源」となるか否かは、担任教師のクラス運営の如何にかかっている。

以上の議論を踏まえるならば、次のようなことが言えるだろう。日本の学校の中では、日本人／外国人の境界線は両義的な性格を帯びている。それは、日本人との関係を断つものとしてはたらくが、場合によっては、つなぐものとしてもはたらく。

では、そのような学校を通過したニューカマー高校生たちは、引き続き日本人が多数を占める環境において、周囲の者たちとどのような関係を持つことになるのだろうか。先行研究を踏まえるならば、日本人／外国人の境界線が小中学校時代にどのように作用していたか、という生徒個々の経験が、その後の周囲との接し方に影響を与える、と考えることができる。本稿では、小中学校を通過してきたニューカマー高校生の友人関係に焦点を当てる。日本人／外国人の境界線は、ニューカマー高校生の友人関係をいかように規定しており、それは小中学校のどのような経験に基づくのだろうか。

3. 調査の対象と方法

3.1. 調査の対象

調査対象は、入試の際に「中国帰国生徒及び外国人入学者選抜」を入試の際に行っている大阪府立の５つの高校（以下、特別枠校）のニューカマー生徒である。特別枠は、大阪府の場合、原則小学校４年生以上で編入学した外国人生徒を対象としている。

特別枠校では、ニューカマー生徒に対して手厚い指導が行われている。入学後のカリキュラムは高校により少しずつ異なるが、抽出授業、習熟度別の日本語指導、ニューカマー生徒を対象とした科目の設置など、ニューカマー生徒に対する特別な措置がとられている。また、ニューカマー生徒にかかわる教師が数多く配置されてもいる。さらに、ニューカマー生徒たちが休み時間や放課後に出入りできる教室が設置されており、その教室を中心に、外国人生徒を集めたクラブ活動も開かれている（志水編2007）。

ニューカマー生徒の人数が比較的多く、特別な支援策も展開されている特別枠校では、外国人の人数が少なかった小中学校に比べて、日本人との友人関係を築く機会の方が確かに相変わらず多いわけだが、外国人同士の友人関係を築く機会も増えている。つまり、日本人と外国人のいずれとも友人関係を築くことができる機会が、日常的にある。そのような特別枠校のニューカマー生徒たちを対象とすることで、外国人／日本

人の境界線が強く書き込まれた日本の学校文化の中で育つことが、かれらの友人関係の形成にどのように作用するかを、より明らかにすることができると言えるだろう。

3.2. 調査の方法

本稿では、２種類のデータを分析する。まずひとつに、インタビュー調査によるニューカマー生徒たちの語りである。2006年６月半ばから８月初旬にかけて、2005年度に大阪府の日本語教育サポーター事業を受け

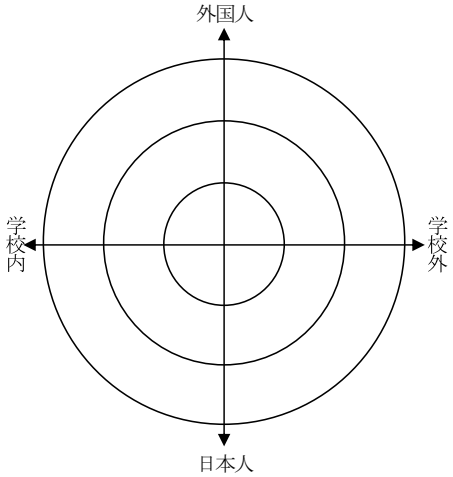

図１　ネットワーク図

表１　事例の概要

生徒	ルーツ	学年	性別	渡日時編入先	在日年数	排斥経験	学校
a	中国	3	女	小学校	8年	なし	A校
b	中国	3	女	小学校	7年	あり	A校
c	中国	3	女	小学校	9年	なし	A校
d	中国	2	女	中学校	1年10ヶ月	あり	B校
e	中国	3	男	中学校	5年	なし	B校
f	中国	3	男	小学校	6年	なし	B校
g	中国	1	男	小学校	4年	あり	B校
h	韓国	1	男	中学校	3年	なし	B校
i	中国	2	女	中学校	3年半	あり	C校
j	中国	2	女	中学校	7年	あり	C校
k	中国	3	女	小学校	8年半	あり	C校
l	中国	3	女	中学校	5年	あり	C校
m	中国	1	男	小学校	4年	なし	C校
n	中国	1	男	中学校	1年半	あり	C校
o	中国	1	男	中学校	1年半	なし	C校
p	ブラジル	2	男	小学校	5年	あり	C校
q	ヴェトナム	2	男	中学校	2年	あり	C校
r	ヴェトナム	1	男	中学校	3年	あり	C校
s	フィリピン	2	女	中学校	4年	なし	C校
t	ペルー	2	男	小学校	3年	あり	C校
u	韓国	1	男	小学校	5年	あり	C校
v	中国	2	男	中学校	3年	なし	D校
w	ヴェトナム	1	女	中学校	3年	なし	D校
x	中国	2	女	小学校	6年	なし	D校
y	中国	2	女	小学校	7年	あり	E校

入れていた大阪府内の特別枠校５校の生徒たち48人にインタビューを行った。インタビューでは、母国での生活状況や教育経験、来日後の教育経験、高校入学の経緯や動機、高校入学後の日常生活や学校生活、高校での学習状況、学校での対人関係、家族との関係、１日の時間の使い方、アイデンティティ、将来展望などが質問された。１回のインタビューはおよそ30分から１時間程度で行われた。インタビューの内容は学校側と生徒の了承を得てICレコーダーで録音され、後にトランスクリプト化された。

もうひとつのデータは、上述のインタビューの際に同時に行ったネットワーク図調査の結果である。この調査では、シール１枚をヒト１人にみたてて、「ふだんからよく話をする人」をあらわすシールを図１のようなチャート図に貼り、人間関係のマップを生徒に作図してもらった(1)。図は、横軸に学校内／学校外、縦軸に外国人／日本人をわける線が引かれ、「学校内の外国人」「学校内の日本人」「学校外の外国人」「学校外の日本人」という４象限が設定されている。また、図の中心から外にかけて３重の円が描かれているが、これは親密度の３つのレベルを表現している。最内円が「なんでも話せる」人、最外円が「ふつうに話せる」人である。生徒たちには、自身が「ふだんからよく話をする人」について、学校内／学校外、日本人／外国人、なんでも話せる／ふつうに話せる／その間くらい、という条件にあわせて、図上にシールを貼ってもらった。シールのそばには、生徒自身からみたその人の属性を記してもらった。なお、貼るシールの上限は20枚までとした。

本稿では、このようにして描かれたネットワーク図のなかから、家族や教師を示すシールや、特定できなかったシールを無視し、友人を示すとして特定できたシールを数え上げ、それを友人関係の数とした。

以上の２つの方法で得られたデータを分析する。ただし、以下のような事例の選別を行っている。まず、インタビューを実施した生徒48人のうち、有効なネットワーク図を回収できた34人に絞った(2)。また、本稿では日本の小中学校での経験に注目するため、高校から日本の学校制度に移行した生徒９人を、34人の中から外した。よって、本稿で事例となるニューカマー高校生は全員で25人となった（表１）。

4. 全体の概観

まず、全事例を対象に、ニューカマー高校生たちが築いている友人関係を概観したい。全25人のネットワーク図に示された友人関係の数の概要を示したのが、表２である。

事例となったニューカマー高校生達の友人関係の平均は、11.5であった。また、外国人生徒との友人関係（以下、対外国人関係）の平均は7.4、日本人生徒との友人関係（以下、対日本人関係）の平均は4.2であった。対外国人関係の方が対日本人関係よりも多いことを、まずは押えることができる。

各象限の平均については、【外国人－学校内】は5.9、【外国人－学校外】は1.5、【日本人－学校内】は2.5、【日本人－学校外】は1.7であった。ここでは、【外国人－学校外】の友人関係と【日本人－学校外】の友人関係

表２　友人関係の概要（N＝25）

	合　計	平　均
友人関係	288	11.5
対外国人関係	184	7.4
－学校内	147	5.9
－学校外	37	1.5
対日本人関係	104	4.2
－学校内	62	2.5
－学校外	42	1.7

の数がほぼ同じであること、そして、【外国人－学校内】の友人関係の数が【日本人－学校内】の友人関係の２倍以上であることに注目できる。【学校外】の友人関係として挙げられているのは、多くは小中学校で出会った友だちである[(3)]。

各象限ごとの友人関係の数から推測できることは、中学校までと高校とでは、友人関係のあり方がエスニシティの面で変化している、ということである。対外国人関係とほぼ同じか、あるいはそれよりも多い数の対日本人関係を結んでいた中学校までと比べて、高校での友人関係は、対外国人関係に偏るものとなっている。この結果は、外国人生徒の人数が比較的多い特別枠校が事例となっていることの影響も、確かにあるだろう。ただ、今回事例となったニューカマー高校生が、対日本人との友人関係よりも対外国人との友人関係をより積極的に選び取っている傾向にあることも、予想できる。

次に、友人関係の数を、親密度を含めて分析したい。

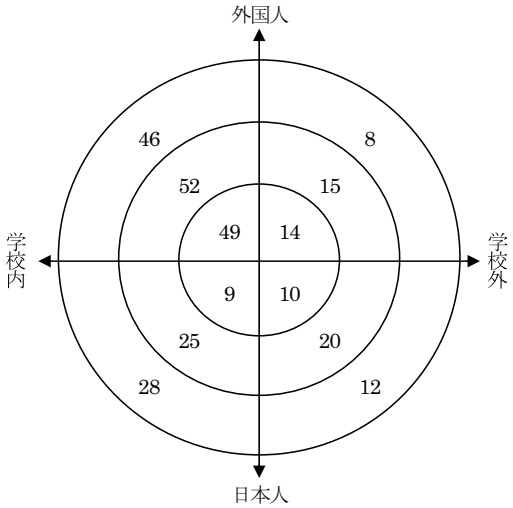

図２　友人関係の親密度（N＝25）

図２からわかることは、対日本人関係が外側に偏りがちであるのに対して、対外国人関係はそうではない、ということである。特に【学校内】で顕著だが、【学校内－外国人】の友人関係が３つのレベルでほぼ同様の数であるのに対して、【学校内－日本人】では、最も親密なレベルの数が、他のレベルに比べて極端に少ない。同じ学校の日本人生徒とは、「なんでも話せる」関係がほとんど築かれない傾向にある。【学校内】ほど明瞭ではないが、【学校外】でも同様の傾向があるように見える。日本人生徒との友人関係は、外国人生徒との友人関係よりも疎遠なものになっていると言える。

逆に言えば、外国人生徒同士の友人関係は、より親密なものとなっている。このことは、高校でのニューカマー生徒の友人関係の対外国人への偏りが、生徒たちによる積極的な選択であるという予想を、裏付けるものであると言えよう。

5. 小中学校時代の経験と友人関係

ニューカマー高校生の友人関係は、かれらの小中学校時代の経験とどのように関連しているのだろうか。ここでは、ニューカマー高校生の排斥の経験に注目する。いじめや差別、孤立といった、集団の周辺部に追いやられる排斥の経験は、友人関係とどのような関係をもっているだろうか。インタビュー・データより、小中学校時代に日本人の児童生徒から排斥を受けた経験を語った者、語らなかった者を分け、前者を「排斥あり」、後者を「排斥なし」とした。結果、「排斥あり」は14人、「排斥なし」は11人であった（表１）。

ここではまず、「排斥あり」の生徒と「排斥なし」の生徒の友人関係について、ネットワーク図を比較検討することにしたい。そして、ネットワーク図から導き出された結果について、インタビュー・データを用いて考察していく。

5.1. 排斥の経験の有無と友人関係

まず、「排斥あり」の生徒14人と、「排斥なし」の生徒11人の友人関係の数を比較する。ネットワーク図からは、表３のような結果が得られた。

表３ 排斥の経験の有無と友人関係数（N=25）

	友人	対外国人			対日本人		
			-学校内	-学校外		-学校内	-学校外
排斥あり(n=14)	8.9	5.9	4.6	1.2	3.1	1.8	1.3
排斥なし(n=11)	14.8	9.3	7.5	1.8	5.5	3.4	2.2
合 計	11.5	7.4	5.9	1.5	4.2	2.5	1.7

「排斥あり」の生徒と「排斥なし」の生徒を比べた場合に、まず大きく異なるのが、友人関係の総数である。「排斥なし」の生徒の友人関係数が14.8であるのに対し、「排斥あり」の生徒は8.9となっている。

このとき注目すべきは、「排斥あり」の生徒は、対外国人／対日本人を問わず、また学校内／学校外を問わず、いずれの対象や場面においても友人関係の数が「排斥なし」の生徒よりも少ないことである。排斥が直接経験された学校の中だけではなく、また、直接排斥を行った日本人だけではなく、友人関係の数が全体的に少なくなっていると言える。

次に、排斥の経験の有無と友人関係の数に、親密度を重ねて検討してみる。図３と図４はそれぞれ、「排斥あり」の生徒と「排斥なし」の生徒の友人関係数を、親密度別に表したものである。

これを見ると、最内円の「なんでも話せる」レベルでは、「排斥あり」の生徒と「排斥なし」の生徒の友人関係の割合は、いずれの象限においてもほぼ同じか、「排斥あり」の生徒の方が大きくなっていることがわかる。特に、学校内の外国人関係では、「排斥あり」の関係数の43％、「排斥なし」の関係数の26％が、それぞれ「なんでも話せる」レベルの友人関係になっている。

ただし、「ふつうに話せる」「その間くらい」の友人関係数について、「排斥あり」と「排斥なし」の生徒を比べると、「排斥あり」の生徒は「排斥なし」の生徒に比べて、割合が少ない。学校内の外国人関係では、「排斥あり」の関係数の57％、「排斥なし」の関係数の74％が、それぞれ「なんでも話せる」以外のレベルの友人関係になっている。

「排斥あり」の生徒は「排斥なし」の生徒に比べて、友人関係の総数は少ないものの、親密な関係の割合はほぼ同じかそれ以上であると言える。

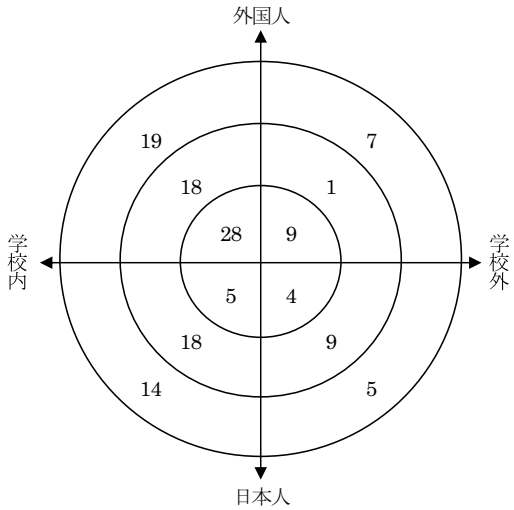

図３　「排斥あり」の親密度別友人関係数（N=14）

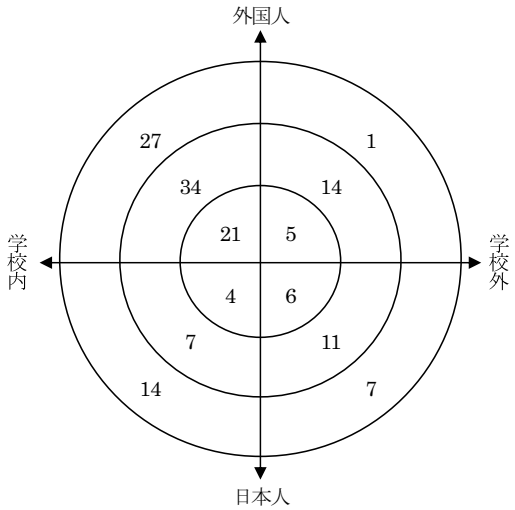

図４　「排斥なし」の親密度別友人関係数（N=11）

5.2.　ニューカマー高校生にとっての排斥の経験

以上のような結果を読み解くためには、ニューカマー高校生たちにとっての排斥の経験について分析しなければならない。生徒たちは、どのような排斥を経験しているのだろうか。そして、日本人／外国人の境界線は、生徒たちによってどのような意味をもたされているのだろうか。

表４　対外国人／対日本人関係数の散布図（太字イタリックは「排斥あり」）

対外国人関係数	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
18	v															
17																
16																
15												s				
14																
13					***j***				f				e			***r***
12								c								
11						***u***										
10				x												
9																
8	***n***															
7		***y***											m			
6							***t***									
5			w				o	***p***								
4		***d***	***k***													
3	a、***i***															
2	***b***、***l***、***q***		***g***													
1	h															
0																

対日本人関係数

ここでは、対外国人関係と対日本人関係の数によって、対外国人／対日本人を問わず友人関係が少ないグループ（以下、ｆグループ）と、対外国人／対日本人を問わず友人関係が多いグループ（以下、Ｆグループ）を比較することにしたい。

表４は、対外国人関係の数を縦軸に、対日本人関係の数を横軸に置いて、各生徒の友人関係数をそれぞれプロットしたものである。生徒のアルファベットは、表１に対応している。太字イタリックは「排斥あり」の生徒である。

グループ分けであるが、対外国人関係数の平均7.4、対日本人関係数の平均4.2を踏まえて、対外国人関係が５以下かつ対日本人関係が２以下の者をｆグループに、対外国人関係が９以上かつ対日本人関係が６以上の者をＦグループとすることにしたい（表の中の薄い灰色の範囲）。よって、ｆグループには生徒a、b、d、g、h、i、k、l、q、wを、Ｆグループには生徒c、e、f、r、sを、それぞれ割り振る。

まず、対外国人／対日本人を問わず友人関係が少ないｆグループからである。このグループの生徒たちの多くは、小中学校時代に日本人児童生徒から排斥を受けた経験を語っている。それは、髪型をからかわれた（生徒ｌ）というものであったり、「いやだったのは、友だちに（名前を黒板に書かれて）いじめられました」（生徒ｑ）、「中学に来ていじめっていうか、先輩とかがめんどくさいっていうか」（生徒ｇ）というようなものであることがある。

ただ、いじめ以上によく確認できるのが、日本語力の不足による周囲からの孤立である。「小学校はやっぱり、日本語ができなくて、みんなと交流ができなかったこと。楽しいことはないです」（生徒b）、「何か、言葉とかわかんないやん。友だちとかできひんくって。ぜんぜんいや。むっちゃ行きたくない」「はじめは、あのう、ちゅう、中国の子ひとりおるやん。で、ずっといっしょにおったで」（生徒ｉ）、「友だちが、いないし、話が通じないし、うん、それだけ変わった。話があまりできない」（生徒ｌ）というような経験が語られた。

日本語がうまく話せないことは、友人関係をつくる際の最大の障害として生徒たちに振り返られている。そしてその最大の障害は、日本人とのコミュニケーションを事前に回避する構えを、ニューカマー生徒にとらせている。

＊：中学校時代は何か困ったこととかは？

ｋ：友だちとのつきあいかな。小学校って給食じゃないですか。一緒に食べる、机あわせたら食べるっていう感じなんで。でも、中学校は違う。作って探して一緒に食べることが多かったんで、やっぱり日本語が不充分、一言で、何ていうかやっぱり傷つけてしまう。自分はがんばって日本語で組み立てて相手に伝わるじゃないですか。やっぱりその組み方が悪かったかもしれないけど。自分ではよかったんじゃないかって。でも、しゃべってたら相手が傷ついてしまうようなことがあります。で、それで（関係が）悪くなったりする。それが原因なんですよ。言葉があって友だちがなくなったことのほうが多いんですよ。別に悪いことしてなくなったより、言葉でなくなったほうが多かったですよ。

＊：言葉ができないから？

ｋ：片言になっちゃうんですよね。抜いたりとか、逆にいらん言葉くっついてきたりとか。それでもう、わけわからんようになって、相手に伝わる場合も多かったんですよ、そのときは。だから、相手に理解しにくいときもあって、逆に向こうだけ納得して、なんか自分で理解できなくて、この子がいつも傷ついてること言われるから、なんかショックやなぁって思ってるんですよ。

日本語力の不足が意図せずして日本人を「傷つけてしまう」。生徒ｋは、「今でもやっぱり日本人としゃべるときにはやっぱ気つかうんですよ。やっぱ考えてからしゃべらなあかんなぁって感じなんですよ」と語る。小中学校での経験から培われた、日本人生徒の心情を配慮する「気づかい」の構えは、生徒ｋが日本人と関係を結ぶ際の障壁になっていると言えるだろう。

このとき、生徒ｋの配慮は日本人との権力関係の中でなされているという点が押えられなければならない。

＊：じゃあ中学校時代は？

ｋ：中１くらいですね。中２から<u>だんだん言葉もできるようになって、で、向こうもわかってくれたから、友だちもできるようになったんですよ</u>。

友だちができるようになったのは、日本語が上手になったからであるとされる。ただ、「向こうもわかってくれたから」と語られるように、そこでは、生徒ｋが日本人と友だちになれるかどうかの主導権は、日本人の側に握られていると言える。友人関係の形成の場面において、日本語力を判定する日本人と日本語力を判定される外国人の間には、権力関係が存在する。しかし、そのような関係は、ニューカマー生徒の配慮によって表面化することはないだろう。

生徒ｋは特別枠校に入学し、多くの中国人と出会う。そのことを生徒ｋは、「やっぱり自分の国と同じ習慣をもって文化をもって、しゃべるようなことも同じやったから、別になんてか、逆に気持ちが楽になって、もう傷つけるようなこともしてもそれを理解してくれるような子がたくさんおったから、逆に安心できた」と表現する。ただ、外国人生徒との関係が必ずしも多く築かれているわけではない。日本人を「傷つけてしまう」前に配慮する生徒ｋの構えは、友人関係一般に対する構えになっているのかも知れない。

別の生徒の語りから、日本人との友人関係ないし友人関係一般を結ぶ際の、別様の構えを確認しよう。日本語力不足による周囲からの孤立は、生徒によって積極的に選ばれたものとして意識されることもある。

＊：日本に来る前と後で生活変わった？

Ｉ：うん、変わった。（中略）<u>友だちがいないし、話が通じないし</u>。うん、それだけ変わった。話があまりできない。

＊：こっちに来たら、中３になったんか。

Ｉ：日本に来たらもう１回、中２。

＊：どう？　中学校、日本の中学校。

Ｉ：同じ中学校の友だち、好き、ないですよ。

＊：どういう風にいややった？

Ｉ：あんまり、話ないから。<u>そのまま放っておいた</u>。<u>どうでもいい</u>。<u>自分が１人でいる</u>。

生徒ｌは、日本語力不足による周囲からの孤立を経験している。しかし、「そのまま放っておいた」「自分が１人でいる」という言葉からもうかがい知れるように、それは生徒ｌにとって積極的に選び取られたものとして意識されている。

日本人生徒に対するそのような姿勢は、現在の高校に入ってからも引き継がれている。「前と一緒。あんまり話したくない。自分、まだ（日本語）下手くそやん。で、何か間違えて言うたとき、日本人、やーやーやー言ってる。まだ言ってるんや。だから、話したくない」。

現在生徒ｌは、外国人生徒との関係が必ずしも悪いわけではない。Ｃ高校の印象について、「先生は優しいし、友だちがいっぱいあるし」と語る。ただ、中学校までの経験で積極的に孤立を選んできた生徒ｌは、自立心の高い高校生であった。一番相談できるのは誰か、という質問に対し、「あまり、そういう相談のこととかないですよ。自分でできるから。自分で決める」「みんな相談したとき、いい意見ないですよ。全部、うち考えたこと言ってる。だから、相談しない」と答えた。対日本人関係だけではなく、対外国人関係も少ない生徒ｌは、中学校までの経験のなかで、周囲の人にあまり頼らない生き方を選択することになったのかも知れない。

先述のように、友人関係の形成の場面では、日本語力の判定をめぐって日本人／外国人の間に権力関係がはたらいている。しかし､そのような関係は､ニューカマー生徒が周囲に頼らない構えを形成することによって、ここでも表面化することはない。

ｆグループの中の、排斥の経験を語らなかった生徒についても確認しておきたい。生徒ａは当時、他の中国人生徒との間にコンフリクトを抱えていた。「仲良くないっていうか、なんか気まずい」。というのも、仲の良かった中国人の友だちが高校２年生の途中で学校を辞めたため、「あんまり学校来たくなかった」。彼女の友人関係の少なさは、生徒ａが置かれていた当時の状況によって説明できると思われる。

韓国系ニューカマー生徒ｈの場合は、小学校までをオーストラリアで過ごし、中学校から日本にやってきた。そのような彼は､中学校時代に嫌な思い出はなく､「英語がしゃべれたから。先生も英語がしゃべれるし」と、言語による困難も感じていなかったと語る。特別枠校に入った目的は海外留学にあり、外国人生徒同士の集まりには「特に別になんもない」とあまり興味を示すことはない。「お金があったら（海外へ）いつでも行きたい」とも語っている。そのような彼は、英語力を資源としつつ、今の高校から少し距離を取っているのかもしれない。友人関係の少なさは、彼のもつ特別な資源から説明ができるだろう。

次に、対外国人／対日本人関係を問わず友人関係が多いＦグループの生徒たちについて検討する。このグループの生徒たちの多くは、排斥経験があまりない。小中学校はいじめや差別があったところとしては、あまり振り返られていない。

Ｆグループの中で排斥の経験を唯一語ったのは、生徒ｒである。それは、次のように語られた。

＊：中学校はどうでしたか？
ｒ：うーん、友好な、楽しかった。
＊：楽しかった？　なんかいやなことはなかった？
ｒ：あー、ときどき悪い奴がおった。
＊：うん。その悪い奴ってのはどんな？
ｒ：あれ、なんか、３、４人くらい。いじめ。
＊：いじめ？　あった？
ｒ：<u>で、２年になって、友だちになって、他の奴いじめ</u>。

いじめを受けていた生徒ｒは、その後、「悪い奴」と友だちになり、自分がいじめる側に回ることになる。そのことによって、生徒ｒはいじめられなくなる。生徒ｒにとっていじめの経験は、いじめられた、経験から、「悪い奴」＝いじめる側への同一化が図られた経験へと、切り替えられているのである。

＊：じゃあ、その悪い奴らと仲良くなったのは、なんでですか？

ｒ：いやあ、ふつうに、仲良くほうがいい。
＊：ふーん。それは、日本語ができるようになったとかも？
ｒ：はい。
＊：ふーん。
ｒ：あいつら、結構しゃべるから。
＊：あ、しゃべるから。
ｒ：はい。
＊：ふーん。
ｒ：ふつうの奴らは、なんか、勉強しすぎ。しすぎて、なんか、自分と話がないとか、お前邪魔とか。

生徒ｒにとって､友人関係は外国人／日本人の境界線をめぐって形成されるものではないと言えるだろう。そこでは、いじめる側／いじめられる側、あるいは､「悪い奴ら」／「ふつうの奴ら」という境界線をめぐって関係が形成されている。相手が日本人であろうと外国人であろうと友人関係が多い生徒ｒは、日本人と外国人の区別を塗り替える別の基準によって、友人関係を築いていると言ってよい。それは、別の権力関係の基準への切り替えであるとも言えよう。

また、Ｆグループの生徒においては、日本語力の不足による周囲からの孤立もあまり語られることがない。確かに、日本語力の不足による困難は語られる。

＊：何か、んー、いやな思い出とかはありましたか？　苦労したこととか。
ｅ：いやー、それはあんまりなかったですよ。とにかく、最初は日本語わからんかったから、それで先生とか何しゃべっとるかわからんかった。それが一番苦労した。

＊：ま、日本に来て、まあ校則厳しいとかあって、特に中学とかでなんか悩んだとかはある？
ｓ：やっぱり、
＊：友だちとか？
ｓ：うん、友だちは悩んでなかった。
＊：友だちはすぐにできた？
ｓ：うん、すぐできた。やっぱり、言葉かな。

しかし、そのような日本語力の不足は、周囲からの孤立を招くことはなかったようだ。上述の生徒ｅと生徒ｓは、それぞれ次のようにも語る。

＊：中学校のときはその先生（＝担任教師）が一番よくしてくれた先生？
ｅ：そうですね。それで、僕日本語わからない。それで、○○中学校っていうところに日本語教室ありますよ。そこ行って、（中略）それ平日じゃないですか。授業とか（抜けて）行かなあかんから。それで、先生がノートとか準備してくれて、あの、帰ってきたらみんな友だちに書いてもらって、してくれました。

ｓ：あと、みんなと授業あわせるのが大変やった。言葉も全然駄目やったから、日本に来て、もう何もわ

からなくて、やっぱ不自由かな、日本、言葉で。友だちはみんな優しかったから、もしわからんかったら、辞書の、辞書もって私と話しかけたりするし、友だちは問題なかったかな。でも、授業についていかれへんかったのは、悔しかったんかな。それだけ。

s：うん、１対１．あれは、１対１のときは、あのー、みんなが、日本語が、ほんでもし別の授業に行ったら、あのー、そのうちと同じクラスの子たちが、私日本語覚えられへんって、ゆう、い、先生にゆって、ふんで、だからうちもみんなと一緒になってん。みんなが私と一緒に授業受けたいしとかゆったから。先生たちがもうみんなと一緒に授業して。ふんでうちがついていかれへんかったら、同じクラスの子に教えてもらったり、あのう、放課後に残って一緒に勉強してたから。よかったやん、○○（中学校）のとき、中学校のときは。だから学校行きたいと思うようになったし。

ｆグループの生徒たちと同様、かれらは日本語力の不足に困難を感じていた。しかし、ｆグループの生徒たちと比べると、生徒ｅや生徒ｓの場合は、日本人の教師や児童生徒からの支援、あるいは、クラス全体をあげた支援が、その困難を友人関係上の困難へと発展することを、防いでいると捉えることができるだろう。日本人／外国人の区別をあまり問わず友人関係が相対的に多い生徒ｅや生徒sは、日本語力が不足している時期、日本人／外国人の境界線が否定的な意味で引かれた関係の中を通過したのではなかった。かれらは、友人関係あるいはクラスの中に包摂されていたと言える。

6. まとめ

本稿では、ニューカマー高校生の友人関係について、日本人／外国人の境界線に注目しながら分析してきた。

ネットワーク図の分析からは、ニューカマー高校生の友人関係について、次の２つの知見を確認することができた。第１に、対日本人関係の数よりも、対外国人関係の数の方が多い。第２に、外国人同士の友人関係はより密接なものに、日本人との間の友人関係はより疎遠なものになる傾向にある。以上の知見から、特別枠校に通うニューカマー高校生たちが、日本人との友人関係よりも、外国人同士の友人関係を積極的に選んでいる傾向にあることが推測できた。

ネットワーク図についての今回の分析結果は、外国人生徒の人数が比較的多い特別枠校の生徒たちを事例としたものであり、すべてのニューカマー高校生に当てはまるものではないだろう。ただし、ニューカマー高校生の友人関係と、日本の小中学校での経験との関連の分析を目的とした本稿では、かれらが高校において、積極的に外国人同士の関係を求めていると思われることに注目したい。日本の小中学校を通過してきたニューカマー高校生にとって、日本の学校文化に強く刻まれているとされる日本人／外国人の境界線は、日本人との関係ではない、外国人同士の関係を求めるようにはたらいているのではないか。

このことは、小中学校における日本人からの排斥の経験の有無と、友人関係数との関連の分析によって補足できる。分析からは、排斥があった生徒となかった生徒を比べた場合、「排斥あり」の生徒は友人関係の総数がより少ないことがわかった。また、「排斥あり」の生徒は、対外国人関係も少ないのであるが、親密度でみると、親密な友人関係の割合が「排斥なし」の生徒よりも多いという特徴があった。日本人／外国人の境界線を強く意識させる日本人からの排斥の経験は、ニューカマー高校生たちに外国人生徒との親密な関係をより求めるようにはたらいているのかもしれない。

ただ、「排斥あり」の生徒たちが、対日本人に限らず対外国人との友人関係も少なく、また、挨拶を交わ

すような「ふつうに話せる」関係が希薄になる傾向にあったことは、日本人／外国人の境界線を意識させる排斥の経験が、外国人生徒との密接な友人関係を求めさせるだけではなく、友人関係一般への構えにも関連していることが考えられる。

では、ニューカマー高校生たちが経験した排斥とはどのようなもので、かれらの友人関係の形成にどのように関連しているのか。インタビュー・データからは、次のようなことが明らかになった。

対外国人／対日本人を問わず友人関係の数が少ない子どもたちは、いじめの存在や日本語力の不足による周囲からの孤立を語った。日本語力不足による孤立は、他人の心情を事前に慮り距離をとる構えや、他人にあまり頼らずに生きる構えを導いているようであった。かれらの友人関係が、相手が日本人であるか外国人であるかを問わずに少なかったことを踏まえるならば、日本語力が不足していた小中学校時代の孤立によって形成されたそのような構えは、対日本人関係だけではなく、友人関係一般への構えになっていると考えられるだろう。

次に、対外国人／対日本人を問わず友人関係の数が多い子どもたちについてである。かれらが排斥の経験を語ることはあまりない。また、日本人からのいじめを受けていたある生徒は、いじめられていた側からいじめる側へと回っていた。いじめをめぐるそのような経験は、「悪い奴ら」に同一化することで、ニューカマー生徒が友人関係を形成する経験である。そこでは、日本人／外国人の境界線ではなく、「悪い奴ら」／「ふつうの奴ら」といった境界線に基づいた友人関係の形成が、導かれていると考えられるだろう。この場合、友人関係の構築の場面において、日本人／外国人の境界線は上書きされていると言える。あるいは、日本人／外国人の境界線に基づく権力関係が、「悪い奴ら」へのアイデンティファイと共に無化されているとも言えるかもしれない。

また、対外国人／対日本人を問わず友人関係の数が多い子どもたちも、日本語力の不足を感じていた。しかしかれらには、それを周囲からの孤立に結びつけることのない、周囲の子どもたちや教師のサポートの存在があった。日本語力が不足している時期のそのようなサポートが、対日本人／対外国人を問わない多くの友人関係を、かれらに築かせたと言えるだろう。そこでは、日本人／外国人の境界線が友人関係の構築に否定的にはたらくことは、防がれているのである。

逆に言えば、対外国人／対日本人を問わずに友人関係の数が少なかった子どもたちの場合、サポートの不足により、日本語力の不足が日本人／外国人の境界線の否定的なはたらきに結びついていたと言えるだろう。かれらは、日本語力が劣る者＝非日本人＝外国人という集団の周辺部に、置かれ続けてきたのである。

以上のように、ニューカマー高校生は友人関係をめぐって、日本人／外国人の境界線をさまざまに経験していた。そしてそれは、ニューカマー高校生の社会化を導くひとつの要素であったと言えるだろう。ある者は、周囲との間にある境界線を意識させられることにより、人間関係からの距離化という構えを導いていた。別の者は、境界線を別のものに書き換えることにより、権力関係を反転させる立場に身を置こうとした。

友人関係が多ければ良く、少なければ良くないというわけではない。ニューカマー高校生にとって、友人関係の少なさは必ずしも困難を導くわけではないだろう。今回の事例になった生徒たちも、人生を悲観視しているわけではなく、多くは現状から積極的な人生設計を模索していた。

とは言うものの、日本人／外国人の境界線の権力性を帯びたはたらきが、人間関係からの忌避や非行文化への接近にニューカマー生徒を導く傾向にあるのであれば、そのようなはたらきを緩和させる手立てが講じられるべきだろう。

クラスの子どもたちや教師がサポートにあたった事例に見られたように、友人関係形成への境界線の否定的なはたらきを防ぐ方策は、充分にあり得る。日本語力の不足が、友人関係の形成を妨げていた。しかし、

日本語力の向上は友人関係形成の十分条件ではない。そこで問題となっているのは、言語力ではなく、日本人との間の権力関係だからである。しかし、日本人／外国人の間の境界線をめぐる権力関係は、ニューカマーの子どもたちが形成する構えによって表面化しづらい。今回の事例で語られていたように、教師によるクラス運営を通じて、ニューカマーの子どもたちをめぐる関係に介入する必要があると言えるだろう。

【注】

(1) ネットワーク図は、ウォルマン（訳書1996）の調査で用いられた図を参考にし、ニューカマー高校生の友人関係を調べる目的に適うように手を加えた。

(2) ただし、少なくない数の生徒が上限に定めた20枚以上のシールを貼ったため、属性等が適切に記されていれば有効とした。

(3) 【外国人－学校外】の象限に、母国の友だちが挙げられることもある。主にインターネットを用いて、かれらは母国の友人と連絡を取り合っていた。

【参考文献】

児島明　2006 『ニューカマーの子どもと学校文化―日系ブラジル人生徒の教育エスノグラフィー』勁草書房.
森田京子　2007 『子どもたちのアイデンティティー・ポリティックス―ブラジル人のいる小学校のエスノグラフィー』新曜社.
太田晴雄　2000 『ニューカマーの子どもと日本の学校』国際書院.
志水宏吉編　2007 『高校を生きるニューカマー―大阪府立高校にみる教育支援』明石書店.
志水宏吉・清水睦美編　2001 『ニューカマーと教育―学校文化とエスニシティの葛藤をめぐって』明石書店.
清水睦美　2006 『ニューカマーの子どもたち―学校と家族の間の日常世界』勁草書房.
住田正樹　2000 『子どもの仲間集団の研究［第２版］』九州大学出版会.
恒吉僚子　1996 「多文化共存時代の日本の学校文化」堀尾輝久ほか編『学校文化という磁場』柏書房215-240頁.
Wallman.S. 1984 Eight London Household、Tavistock（＝1996　福井正子訳『家庭の三つの資源』河出書房新社）.

Friendship-related Issues of Newcomer Students: Focusing on Experiences in Japanese Elementary and Junior High Schools

HIGA Yasunori

In this paper, I examined various issues concerning newcomer high school students' friendship with others in Japanese elementary and junior high schools. Recent studies indicated that the boundary between Japanese and foreigners can operate on suppression or resource for newcomer students. Thus, I focus on newcomer student's experiences centering on the boundary between Japanese and foreigners in Japanese elementary and junior high schools. I address this by means of network maps and interviews. High school students who sat for a special entrance examination in Osaka prefecture are considered as examples.

In conclusion, newcomer students are friendlier with foreigners than Japanese. Further, the experiences of expulsion relate to fewer friendships, irrespective of the friendships being with Japanese or foreigners. Expulsion due to lack of Japanese skills may form a posture to take the distance from the friendship. This calls for intervention in the relations of newcomer children with others by a class unit.